

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けてください。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下としてください。

NITS・教職大学院等	実施機関名・連携機関名 実施機関：山口大学教育学研究科（教職大学院）、NITS 山口大学センター 連携機関：山口県教育委員会
コラボ研修プログラム	事業名：NITS・山口大学教職大学院コラボ研修 「新たな教師の学び」を創る「ちゃぶ台 Cohort」（NITS カフェ）
支援事業報告書	研修等名：NITS・山口大学教職大学院コラボ研修 「新たな教師の学び」を創る「ちゃぶ台 Cohort」 開催日時：令和 5 年 8 月 26 日 10:00～15:30 開催場所：セントコア山口（山口県山口市湯田温泉 3-2-7） 参加人数：55 人 同 属性：講師 1 人、講師助手 1 人、現職教員 22 人（小 11、中 7、高 4）、教職大学院生 9 人、教委等 6 人、大学教職員 16 人

内容：

(1) 開会行事

主催者（教職大学院）を代表し、佐々木司専攻長が、NITSと本学教職大学院とのつながり、NITS カフェへの取り組みの歩みと成果、カフェスタイルの可能性と今回の意義を盛り込んだ開会の挨拶を行った。

その後、NITS の紹介、「山口県教員育成指標」上の位置づけ、日程説明や諸連絡を行った。



(2) 講演

午前は、「この国の価値を次世代につなぐ ～起業家精神をもって生きること～」と題して、株式会社「和える」代表取締役、矢島里佳さんによる講演を行った。講師は、日本の伝統や先人の智慧を、暮らしの中で活かしながら次世代につなぐ事業を展開する若き起業家であり、APEC「Best Award 2017」や DBJ「女性起業家大賞」等の受賞者として、産業・経済・労働界や芸術文化・観光振興の世界で広く知られている。講師の歩みや経験から溢れ出る、「今をどう生きるか」という問いへの熱い想い、価値や科学を拠り所にしなが実践的、創造的に社会に関わっていく姿は、参加者（教職員）の視野を広げ、多角的多面的なものの見方考え方や創造的、開発的思考を育てる豊かな 2 時間となった。

2040 年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手を育成するためにも、参加者（教職員）自身が、予測できない未来を切り拓き、持続可能な社会に発展させていける人材、イノベーションを創出し活力ある未来社会を築いていける人材となるために、貴重な学びの機会となった。



(3) 「カフェ（班別グループワーク）」

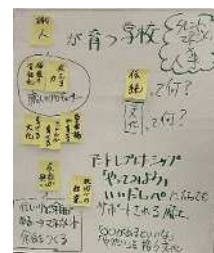
午後は、講演からの「学び」の交流をとおして自身の有り様や教職生活について省察する（テーマ 1）とともに、「これからの社会における学校や教育の姿」を描き、学校や教育の変容の方向、改善アイデアを考える（テーマ 2）こととした。グループは、校種を越え、成長しあう、学びあう仲間集団としてワークをさせたいと考えたこと、今までの NITS カフェでも「他校種教員の考えや発想が刺激や参考になった」という声が多かったことから、各校種が混在する形で 8 班編成とした。

カフェの最初に「個人探求」を 20 分確保し、テーマ 1 では「キーワードピラミッド」や「社会人基礎力（レーダー）」により、テーマ 2 では各自が整理・提案しやすい任意のやり方により、自身の考えやアイデアを整理した。

その後の「グループワーク」を「ワールド・カフェ」で行うこととし、65 分の「国内協議」では、2 つのテーマについて、各班（国）が和やかで支持的・肯定的雰囲気の中で感想や想いを出しあい、学びを共有するとともに、シェアリング用ポスターを作成した。

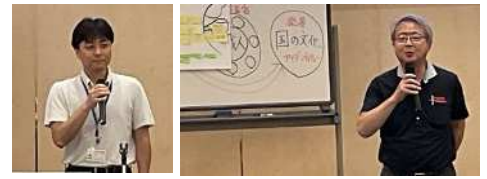
次に、発表者を各班（国）に残し、班員（国民）が他の班（国）の発表を学び意見を交流しあう「旅行」を 2 回（各 20 分）実施した。旅行者は新たな視点、発想や改善アイデアに接し、それぞれの教職・人生経験、置かれた状況、立場や学校の現状等に応じて、学びの切り口、中身や今後の生かし方、成果還元の有様や学校の現状等に応じて、学びの切り口、中身や今後の生かし方、成果還元の有り様が違うことを理解しながら、常に「子どもたちを中心に据えた」教育、学校や教職員のあり方を考える時間となった。その後、自分の班（国）に戻り、旅行先での情報や交流からの学びを共有し、最後に全体でシェアリングを行った。

今回は「ワールド・カフェ」形式の導入により、多角的多面的な見方考え方の獲得、自身の視点や発想の



広がり、語る・伝える中での学びの整理や深化等にアプローチする場面が各所で広がり、「教師の学びの新たな姿、形」を感じさせる Cohort 研修となった。

その後、山口県教育庁教職員課の丸山茂生管理主事が、講演やカフェの様子、研修内容と自身の経験を重ねあわせる形で、これからの価値創造、教育や教職のあり方、教職員の成長と職場環境等について総括し、講評を行った。



(4) 閉会行事

最後に、NITS 山口大学センターの和泉研二センター長が謝辞および閉会挨拶を行い終了した。

成果：

研修受講後の振り返りは質問紙法（Google Forms）により行い、現職教員、教職大学院生、教委関係者 37 人のうち 34 人の回答を得た。

(1) 「学びの満足度」を 5 件法で収集し、「強く良かった」が 27 人、「かなり良かった」が 7 人となった。

(2) 「研修区分ごとの学び」、「カフェスタイルの評価」や「キャリア形成や人材育成に必要なもの」について自由記述で回答を収集した。「内容」で概括したが、ここでは参加者の「振り返りシート」から一部を紹介する。

① 講演での学び

・「自分がしたいことに素直に生きる」という言葉が心に残りました。子どもと接する大人として、自分の生き方、言動、働き方に悩むことが増えてきていたので、とても刺激的な 2 時間でした。自分は何がしたいのか、どう生きていきたいのか、立ち止まって考えられていなかったと思います。余白を大切に、本当にしたいこと、ありたい自分であるためにどうすれば良いか考えながら、2 学期を過ごしていきたいと思いました。また、軸をぶらさず、その軸を太くしていくことや、一つのことを深掘りして真髄まで理解することも常に大切にしたいと思いました。そんな人の姿が、きっと周囲に影響を与え、良い集団にしていくのだろうと感じました。もっともっとお話を聞いていたかったです。

・矢島さんのマインドは非常に勉強になりました。正にこれから子どもたちにとって、大切な考え方の一つだと思います。また、学校が子どもたちにとって挑戦しやすい、子どもたちも教師も、互いに失敗を学びと捉えられる場にするためにも、教師自体のマインドセットの転換が非常に大事だと感じました。



・いつも講師の方の専門分野を教育にどう活かすかという視点でお話を聴くようにしています。矢島さんからは、学校を擬人化してみると長所短所、成長ビジョンなどが見えやすくなることを学びました。カリキュラムオーバーロードによる表層を掬うだけの教育ではなく、興味をとことん掘り下げる経験がこれからの子どもたちには必要だと感じました。本日に至らなければ、本当に和えることにはならないのだと思います。失敗さえもポジティブな学びに変えるレジリエンスを教師も子どもも獲得していくことが重要です。

② カフェでの学び

・校種、年齢、立場の異なる方々と交流することができるカフェ形式はとても充実していました。矢島さんの講演を自分に引き寄せて聞いているため、自分がこれまで思っていたことを中心に、納得したり思考を深めたりしていましたが、他の方の視点を伺うことで、別の見方を取り入れることができたり、もともとあった自分自身の考え方にも深まりを感じたりすることができました。

・カフェの一番の学びは、「やっぱり同じ講演を聞いても、刺さるポイントが違うんだな。」ということです。私はつつい総合的な学習の時間寄りな反応をしていました。ほかの皆さんはチームや学校の先生方のやりたいを如何に作るかといった問いでした。こういったずれは面白さでした。



アイデアや工夫したこと：

(1) 研修行事の企画運営にあたり、「カフェ（形式）」の魅力である心地よさ、落ち着き、温かさやゆったりとした空気感を大切にすることとし、ゆとりある時間（終日日程）や環境（集いやすい場所やゆとりある広さ）を確保するように配意した。

(2) 講演では、国内外で活躍する若い世代の起業リーダーを招聘した。教育界以外の世界で「感動的な生き方生き様を貫く感動的な人物に出会わせる」ことは、教職員自身の感動体験、よりスケールの大きな社会人モデルとなり、「学び続ける教師」としてのキャリア形成、資質能力向上に好影響を及ぼすことを期待した。

(3) カフェでは、本学が 17 年の経験を有する「ちゃぶ台方式 = カフェ形式」のノウハウやワークツールを活かすよう努めた。参加者の階層、所属、経験年数等による「上下」「一方的」関係を防ぎ、立場、経験や校種を乗り越えて支持的・肯定的で協働の空気感の中で協議や交流が進むよう配意した。

(4) 研修行事としての実効性を高めるために、ワークのツール（手法）として「ワールド・カフェ」を取り入れた。参加者それぞれの「学び」を大切にするとともに、多様な考えとの出会いによる視野や思考の広がり、話す・聞く・尋ねる場や機会の重視による指導力の向上等を意図して取り入れた。